

ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優 （聞き手・小峯隆生）

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身につけるべく、今月も、ともに学んでいこう。

第六回

三四郎はなぜ名古屋で下車したのか？

佐藤 前回、歴史には、起こったことを時系列で残していく「記述史」と、歴史上の出来事に意味を見出し、結び付けて評価していく「出来事史」があるとお話ししました。

多くの歴史は文字に記され残されてきました。我々は、残された活字を「通時性」と「共

時性」の双方から読み解かなくてははいけません。「通時性」が対象の歴史的变化を追いかけるのに対して、「共時性」は同一の時における変化や差異に注目する見方です。

歴史をより深く理解するためには、その当時の人々が、書物などをどのように理解していたか、といったところまで踏み込んで読み解かなくてはなりません。単に書いてあることの表面的部分、表層部分を、そのまま受け取っていたのはいけないのです。

皆さんもよくご存知の夏目漱石の『三四郎』。これは、明治41年（1908年）9月1日から、朝日新聞に連載されました。三四郎は九州出身で、列車にのって上京してきます。途中下車をしますが、どこで下りたか覚えていますか？

——確か、名古屋です。

佐藤 なぜ、名古屋だったのでしょうか？

——当時、そこに駅があったから……。

佐藤 「共時性」の観点で着目すると、その当時、朝日新聞社が、名古屋に支局を開設したばかりでした。購読者を増やしたい朝日新聞社は、夏目漱石に注文して、名古屋を登場させたのです。

こうした観点から『三四郎』を読み返してみると、また違った印象を受けるのではないのでしょうか。単にそこに書かれているものを表面的にとらえるのではなく、その時代はど

んな時代だったのかなど、視点や関心を変えながら読んでみるとよいと思います。

人間の脳は、高い関心を抱いているものが、頭に入ってくるようになっていきます。ラブレターを投函^{とうかん}するとしましょう。そうすると、普段は気にも留めていなかった郵便ポストの位置が、突然、気になり出します。また、こんなことを試してみても面白いと思います。朝の通勤通学で、自宅から駅までの道中、「赤色」に意識をおいて駅まで歩いてみてください。すると、「こんなにも赤い色が街にはあふれているのか」と気づくはずです。

——その感じなら、なんとなくわかります。妊婦になった友人が、街にはこんなにも妊婦や、赤ちゃんがいたのねって驚いていました。でも、それって、急に妊婦さんが増えたわけでもなく、彼女の認識の問題ですよ。感性のアンテナを張ると、向こうから情報が飛び込んでくるというわけですね。

佐藤 そうです。感性のアンテナの張り巡らせ方で、新しい発見があったり、違うものの見方ができるのです。人間の意識、認識には、利害や関心が常に潜んでいます。そのことについて言い表したのが、ユルゲン・ハーバーマスです。彼の『認識と関心』という書籍が、未来社から出ています。多くは触れませんが、ぜひ、読んでみてください。

理由なき反抗の理由？

佐藤 さて、子供の頃から成績がよくて、頭のいい“よい子”と、言われてきた人は、きっと、学校の先生や親の言うことに反論をせずによく聞いてきたのではないのでしょうか？
そのため、そうした人は、時に「学校秀才」と揶揄されてきたかもしれませんね。

人間は誰しも叱られるのが嫌いですし、叱られることに慣れていません。誉められることのほうが嬉しい。これは、なぜなのでしょう？

——私は、「学校バカ」で、勉強もそんなに好きではありませんでしたので、叱られることに慣れているかも（笑）

佐藤 廣松渉さんの『新哲学入門』の中では、賞・罰行動＝サンクションという言葉が出てきます。

人類＝ホモ・サピエンスは、動物学的に見ると早産であり、長期間の養育を受けて生育していきます。養育者やその他の身近な人たちが、養育期間中に様々なことを躰けていく。このことを廣松さんは「躰、仕向、仕込」と表現しています。

母親をはじめとした養育者は、幼児に対して、意識的か否かにかかわらず、いいことをした時に頭を撫でたり、いけないことをした時に叱ったりといった行動を取ります。そのたびに幼児は、ほとんど無自覚に賞罰に対する感覚を形成していきます。その結果、誰し

も叱られることは嫌だ、となるのです。

では、幼児は受動ばかりかといえば、時に、抵抗・反抗といった行動を見せることがあります。

この反抗の反応こそが、人類の文化に変容をもたらす大きな要因となっているのです。これがなければ、文化が変わらずに、だんだんと固定化していってしまいます。単なる「いい子」だけでは世の中は前に進んでいかないのです。何でも、「はい、はい」と聞いて言われたことをやっているだけではダメだということです。

われわれは人生劇場で、役割を演じているにすぎない

佐藤 廣松さんは、人生を巨大な劇場と見なしています。

そこでは、誰が、主役であり、脇役、観客、そして、脚本家なのかはわかりません。その劇場の中に投げ込まれて、われわれは何かの役を演じ、自他双方が期待する行動＝役割を果たしています。

たとえば、いままさに、この瞬間、私は教えるという役割、皆さんは教わるという生徒の役割を演じているわけです。共演者である皆さんが、私のことを教える人と認識してくれるおかげで、この場が成立しているのです。私は教える人という役割の中に、皆さんは、教わる人という役割の中に入っているのです。

ただし、ある役割が固定すると、そこで期待されるとおりの行動を、取らなくてはなら

なくなります。こうした固定化した役割を廣松さんは「役柄」と名づけました。もっとも、役柄もそれぞれの状況において変化します。

たとえば、サラリーマンで平社員のAさんを例に考えてみましょう。職場では、課長に対しては部下という役柄、職場仲間に対しては同僚という役柄です。ここですでに「部下」と「同僚」という「役柄の変化」が見られます。そして、Aさんが家庭に戻れば、子に対して親という役柄、買い物に行けばお客という役柄です。Aさんは、様々な「役柄」のなかで、それぞれの役割を演じていることになります。しかも、この「役柄」は一個人が所有するものではなく、社会や組織にすでにあるものです。会社なら部長、課長、係長といったポスト。野球でいえば、投手、捕手、内野手といったポジションです。

平時なら、こうした既成のポジション、ポストはきちんと機能しますので、その役柄を演じていれば、それで構いません。しかし非常事態では想定外の事態が発生しますから、固定化された既成ポジション、ポストでは対応できなくなってしまいます。

——非常事態では、機能しなくなったポジション、ポストに関係なく、正しいと思う方向に動いちゃえばいいんだ！

佐藤 そうですね。でも、そうした時にわれわれを動けなくしているもの、人間の行動を規制してしまうものの一つが、先に挙げた賞・罰行動です。

こんな行動したら〇〇さんに怒られるんじゃないか、世間の非難を浴びるんじゃないか、という思いがよぎります。

また、人間の行動を規制するものには、「笑い」もあります。

他人に笑われることは、人間の行動を強く規制する原理になるのです。

そもそも、笑いというものは、とても興味深い人間の行動ですね。

なぜ、人間にしか笑いはないのでしょうか？

フランスの哲学者、アンリ・ベルクソンが書いた『笑い』という書籍があります。彼は、人間特有の「笑う」という現象と、それを喚起する「おかしみ」の構造を分析し、その社会的意味を解明しようと試みた哲学者です。

笑いには、悲しい時に笑う、悲しみの笑い、あるいは、照れ笑い、といったものも含まれます。

人間は、自分の論理で理解できることと、理解できないことの境界線に触れた時、笑うんですね。

ときどき、「もうとんでもないことをしでかしてしまったのにもかかわらず、ヘラヘラと笑って報告に来る部下がいて困るんです」というような話を耳にしたことがあります。これなどは、部下にとっては、照れ笑いとかではなく、もうそのミスをしでかしてしまった自分のキャパシティー、処理能力を超えようとしている非常に危険な状態を示す笑いなんですね。

――なるほど。原発事故の説明をする担当者にそういう表情の人がいるのを TV の報道で見たような……。あれは、危険を示すサインだったんですねー。私も、締切が迫っているにもかかわらず、どうにも文章かけなくて笑えてきたことありました。

佐藤 笑いや怒りは、考えたうえで、出てくるものではありません。

無意識のうちに、直ぐ出てきますよね。

だからこそ他人に笑われる、怒鳴られるということは、その人の行動を規制する上で、非常に大きなウエイトを占めていることになります。

笑われたり、怒鳴られたりした時に萎縮いしゆくしないようにする、反対に自分自身の笑いや、怒りをコントロールするには、「哲学的な訓練」が必要になってくるのです。

〈つづく〉

今月の内容をより深く学ぶための本

- 『三四郎』夏目漱石著 新潮社（新潮文庫）ほか
- 『認識と関心』ユルゲン・ハーバーマス著 未来社
- 『新哲学入門』廣松渉著 岩波書店（岩波新書）
- 『笑い』アンリ・ベルクソン著 岩波書店（岩波文庫）